

2021. 5. 23. 主日礼拝説教

聖書：エゼキエル書 37章 1-14 節

『生き返るとは、主を知ること』

阪神大震災の復興は遅々として進みませんでした。否、語弊があります。建物や道路といったハード面は時間の経緯とともに進みました。進まないどころか、よりひどい様相を呈してきたのが「人のこころ」という問題でした。当時、ボランティア後進国のわが国では大災害の後で次に何が被災者を襲うのかがよく分からなかったのです。その正体は一言でいえば「孤独」でした。地域社会が根こそぎ崩壊し、旧知の関係性は瓦解しました。揺るぎないと信じていた家族関係さえ潰え去ったケースもたくさんありました・・・。

驚愕、嘆き、悲しみ、怒り、後悔、焦燥、絶望、諦観・・・そして最後に孤独がヒタヒタと忍び寄ります。孤独はゆるやかに人を蝕みます。それは「た・す・け・て」という、たった四文字の言葉さえ奪い取ってしまうのです。

高齢の一人暮らしの方々の孤独死が顕著に増え始めたのは、ちょうど仮設住宅が撤去され、復興住宅への移行直後からでした。不備ながら互いを確認し易かった仮設を思えば、復興住宅の重い扉はそのまま閉ざされた扉となったのです。

更に被災高齢者を緘黙させたのは皮肉にも「頑張れ」という言葉でした。「もうクタクタで頑張れません。だからもう何も要求しません」と言い残して逝かれた方がいました。励ましはそのまま圧力という暴力に容易に変わるのです。それは孤独を深めてしまうだけなのです。

エゼキエルという預言者はバビロン捕囚の渦中に生きた人でした。紀元前 597年、エルサレムから遙か遠いバビロンに第一回捕囚民として一握りの同胞とともに連行されました。彼は5年目の593年から568年まで活動を続けます。おそらく最初の5年に驚愕から孤独に至る一連の被災後のプロセスを体験したと考えられます。絶望に打ちひしがれる仲間を前にして、彼は預言者として立つことを決意しました。

エゼキエルは新しい提案を幾つか提示します。ひとつは、神がこの遠隔地バビロンまで来られて「在る」という事柄です。当時の「神」は民族や国家の衰亡と共に滅びたり捨てられたりしたのが普通ですが、ヤーウエの神は約束の地を離れた少数の者さえ決して見捨てないばかりか、救うために来られたということ。加えて、それまでの預言者がほとんど使わなかった「霊」という言葉—本来は神の言葉を預言者に運ぶ役割の意—を神の慰めの遍在化として積極的に用いた点でしょう。

エゼキエルの働きのモチーフは、孤独に苛まれる捕囚の仲間希望と未来の約束を語り、彼らを自壊から免れさせることでした。同じ捕囚という憂き目に遭い、愛する妻も亡くした(24章)エゼキエル自身も内なる地獄と外なる地獄に生きる被災者でした。彼はそれらの体験を「幻」という形で言語化を試みます。本日の聖書の箇所にある谷底の無数に転がる骸は、まさにエゼキエルとその同胞たちの現実に裏打ちされた心象風景だったことを思うのです。

エゼキエルは頑張れなどという無責任な励ましはしません。そうではなく、ただ主を知れというのです。そして、その主こそ枯れた骨をそのまま留め置く方ではなく、必ず自らの霊を吹き込んで生きる側へと押し出して下さる方であると言うのです。孤独に埋没していても、その墓を開いて未来に向かい共に歩もうと呼びかけられる方だと言うのです。わたしたち教会に集う者も、このペンテコステの朝、同じ霊に吹かれる恵みを感謝したいと願います。